

研究員 の眼

3方よしの関係が地域の価値を 高める？

社会研究部 都市政策シニアリサーチャー 塩澤 誠一郎
(03)3512-1814 shiozawa@nli-research.co.jp

3方よしの関係は、公共施設に限ったことではない。例えば、筆者がよく通りかかる一角に、住まいのエントランス周りに花を飾り、よく手入れしているお宅がある。見事に咲き誇ったときは、通りがかりに目にする者を楽しませてくれて、ときには、手入れをする主人に、「まあ、きれい。なんて言う名前のお花ですか？」などと声をかける者がいて、ひととき花を介した立ち話に花が咲いたりする。

こうした光景を目にするのは、近くに住む同じ地域住民として、とても好ましく感じる。なぜだろう？住民同士の交流が自然に生まれる、平和なコミュニティに属しているという安心感を、無意識に感じているからではないかと思う。

花を手入れするこの家の主人は、最初から人を楽しませようとして始めたのではあるまい。おそらく自分が好きなことをして楽しんでいるにすぎない。しかし見るものを楽しませ、会話を生み、その光景を眺める人に好ましい感情を抱かせる。好きなことをする人、それを見学する人、その光景を眺める人の3方よしを成立させている。

野球と庭の花を例に、空間の3方よしについて考えてきたが、そこには、3方よしを成立させる条件があるように感じる。まず好きなことをする人の、好きなことを外から目にするができることである。そして、目にするだけでなく、身近に接することができることだ。

花はお宅の庭で育てているものの、それを通りから目にすることができ、近づけるからこそ、見る人を楽しませる。野球場も、プロの試合が行われるようなスタジアムではなく、公園の中でネット越しに眺められるからこそ、楽しむことができる。

つまりその活動が、道路や公園という公共空間から接することのできる状態が必要な条件と言える。さらに、いっとき複数の人がそこに留まることができる広さが必要で、周囲の人がその光景を眺めることができる、見通しのよさがなければならない。

個人的に好きなことを、パブリックな空間に開くことで、他者との関係が生まれ。それによって、個人的な行為を、ある種、公共性のある営みに変化させていると言えるのではないか。

そんな3方よしの関係が所々で生まれていくことで、地域にうるおいを与え、良質なコミュニティが育まれ、地域の価値を高めることにつながるように思うのである。